笛と太鼓

室生犀星

青空文庫

子供ができてから半年ほど経つと、国の母から小包がとどき、ひらいてみると、小さい太鼓と笛とが入つてあつた。太鼓には六十銭といふ赤縁の正札が貼られたままあつた。巴の紋のついた皮張りで、叩いてみると、まだ新しいだけよく鳴るのである。無器用な作りを見せた笛にも、やはり田舎らしい、暗(くろ)ずんだよい音いろがあつた。

片町といふ目ぬきの田舎の市街に、中島といふおもちややがあつた。風船、ゴム玉、汽車や刀や、さまざまな珍奇な弄品(おもちや)が、ところ狭いまでならべられ、サアベルや鉄砲の鍼力(ぶりき)の光つた色が、ちかちかしてゐた。そこの店さきに立ち、あれでもない、これで

もないと、択(よ)り急いでゐる老いた母の姿が、じくじくした時雨つづきの、どうかすると霰でも来さうなうそ寒い日和と一しよに、やさしく、目にうかんでくるのである。

太鼓は毎日よく鳴るのである。とんとんとことんといふふうに、それを部屋にゐて机にかじりつき、あたまが濁り悐へかねてゐるときにも、知らず識らず私はほほ笑むやうな気になり、やかましくても叱るわけには行かんのである。遠いやうにも聞え、また近近と頭にひびきもする。しまひにはペンを投げ出し、いらいらした顔と目をこすり、こすることによつて一度に草臥れた私は、子供のそばへ行き、かんかんと太鼓を叩くのだつた。あたまは益益いたむが、坐り込んでさうしてゐると何だか優しくなれるからだ

つた。正札だけは人がみてもをかしいから除(と)つてしまひませうと、女が六十銭とかいた四角な正札に指さきをつけるのだ。さうして置いておけ、いや剥いだ方が、いいかな、いややはりその儘にしておくんだと自分でもわかり兼ねるやうに、この小さな太鼓をみつめるのだつた。

朝は朝晴れのなかに太鼓の音がひびくのである。勉強部屋へはいらぬ前に、こんな音をきくのは、頭の調子をわるくするとは知りながら、疲れた頭になつて泣くな泣くなと太鼓を叩くのである。それゆゑ、つい書きもののとつつきが逸(そ)れ、ぼんやりと庭をながめてゐるやうな日になることが多かつた。

青空文庫情報

底本：「日本の名随筆25　音」作品社
　　1984（昭和59）年11月25日第1刷発行
　　1999（平成11）年4月30日第17刷発行
底本の親本：「室生犀星全集　第二巻」新潮社
　　1965（昭和40）年4月
入力：門田裕志
校正：仙酔ゑびす
2012年12月9日作成
青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

笛と太鼓

室生犀星

２０２０年　７月１３日　初版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　http://aozora.xisang.top/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/